

第42号 華山会報

令和元年6月1日
公益財団法人華山会

華山の「死」と「義」

東北大学大学院文学研究科 准教授 杉 本 欣 久



およそ一八〇年前の天保十二年（一八四一）、渡辺華山は自ら命を絶ち、武士としての責務を全うした。自身の行動が藩主の立場を危うくするのを憂えての結果であった。確かにそれは「不忠」「不孝」であったかもしれないが、最期まで自らの「義」は守り通したのである。華山が亡くなった四十九歳に達しようかという自分自身を省みれば、日頃の身の処し方について「お前はどのように生きるのか？」と、突きつけられているような感覚にとらわれる。

一九九三年公開の押井守監督作品「機動警察パトレイバー 2 the Movie」というアニメ映画には、「正義」という大義を掲げた「戦争」の裏側で、「不正義」という「平和」を戦後の日本は享受してきた、といった趣旨のセリフがある。「義」を正しく貫き通す難しさは、江戸時代の武士であろうと現代の我々であろうと変わらない。問題の本質に向き合わず、目の前の矛盾を妥協的に受け入れ、自ら傷つかないように生きる方が楽だからである。

武士の生き方については、江戸中期の肥前佐賀藩士・山本常朝が著した『葉隠』中の「武士道と云うは、死ぬ事と見付けたり。」という一節がよく知られる。けれども、「我人、生くる方が好きなり。多分好きの方に理が付くべし。もし図に外れて生きたらば腰抜けなり。この境、危うきなり。図に外れて死にたらば、犬死氣違なり。」と、あとに続く文言はあまり認知されていない。人はどうしても自分可愛さのあまり、「生」に執着しがちである。だから表裏の関係にある「死」というものを常に意識して生きなければバランスがとれない、というわけである。実は華山も、

救荒（飢饉）の策は常々の心掛にありて、その時に臨んではとても致し方これなきに付、まず背水の陣と相心得、討死の覚悟これ有るべく候。これ大変（大事）に当り、力を用うる根本の第一義に候。右の通り、討死の覚悟とて、ただ覚悟決定のみにてはその覚悟も無益なる事にて、生死を決するほど易きに似て、難きはこれなく候。生死、その所得ざれば死も狗死にて候。（『国家老死書簡』）

と、同様の趣旨を述べている。世を平穩に治める責務を担った武士は、日頃の備えとして「背水の陣」や「討死の覚悟」との意識を持つべきである。けれども生死を決するような場面において「覚悟」のみで臨むのは、簡単なようで実は難しい。ところを得なければ、まさに「犬死」となってしまう。そのバランスを深く考え、常々思いを巡らしておかねばならない、と。現代の日本で「死」を論ずることは、どこかタブーに触れるかのような風潮がある。けれど我々は日々、「死」に向かって歩み続けているのも事実である。果たして我が身を賭してまで守るべき「義」とは何なのか。現代の日本人は、改めて自問自答する必要がある。晩節としての「死」を意識することで、「生」は有意義なものとしてますます光り輝く。華山の「生」と「死」は、まさにそんなことを教えてくれているのではないだろうか。

ドナルド・キーン 名誉館長の思い出

前田原市博物館長
鈴木利昌



平成三十一年二月に二十九年から
田原市博物館の名誉館長に就任して
いただいたコロンビア大学名誉教授
のドナルド・キーン先生（鬼怒鳴門）
がお亡くなりになりました。
私がキーン先生に初めてお会いで

きたのは、平成十五年八月二十七日
で、先生が田原市博物館を訪ねて来
られた時でした。この日の一週間前
に田原町と赤羽根町が合併し、愛知
県内で、平成最初の合併市として田
原市が誕生したのです。もちろん文
学研究者としてのドナルド・キーン
さんの名前は存じていたものの、訪
問目的はわからずに、当時館長を勤
めていた加藤と私で対応させていた
だきました。たまたま愛知県に来る
要件があり、江戸時代の文化人・知
識人として活躍した渡辺華山をふる
さとの偉人として展示の中核として
いる当館を訪ねて
くれたものと思っ
ていました。まだ、
『新潮』への『渡辺
華山』連載（平成
十八年一月から十
九年一月まで、十
九年に単行本とし
て刊行）のことを
存じ上げていなか
った頃です。その



翌年の末に、ご要望のあった昭和六
十年（一九八五）に田原町文化会館
で開催した展覧会を記録した図録
『渡辺華山名作集』をご寄贈したお
礼状をいただきました。この図録を
ご希望だった理由は、華山が母親を
描いた作品（田原市博物館蔵）が掲
載されていたからのようでした。こ
の頃、私は平成十七年に開催する特
別展「渡辺華山・椿椿山が描く人物
画」展の記念講演を依頼し、承諾を
していただいたのです。承諾のお手
紙を拝見すると、キーン先生は、こ
の直前に白内障の手術を受けられた

目次

題字「華山会報」元華山会理事

故小澤耕一氏

P① 華山の「死」と「義」

杉本欣久

P② ドナルド・キーン名誉

館長の思い出 鈴木利昌

P② 目次

P⑤ 視察 高野長英の生誕地

― 水沢・花巻の旅

P⑧ 渡辺華山『毛武游記』⑨

P⑫ 四州真景の旅 ⑤

旅先で訪ねた人物

久保木清淵

P⑯ 公益財団法人華山会

田原市博物館からご案内

ばかりでした。

また、『華山会報』第十五号（平成十七年十月発行）巻頭に「これからの華山研究の課題」と題して執筆していただきました。「華山にとつて世の中で一番大切な人物が母親であったのは明白であり、実際、母親の肖像画を再三描いたらしいが、現存しているものは一点しかない。それなのに、この絵が華山の研究の中で取り上げられることがない。今年になって、田原市博物館から発行された目録に、ようやくカラー写真が初めて掲載されたが、これまではモノクロでも一回しか掲載されなかつ



たと思う。この絵が取るに足らない駄作と思われたのか、あるいは贋作と懸念されたのか、今まで掲載されなかつたものである。弟子たちが描いた華山の肖像画も全部見たいと思う。いつも華山に関する書物の表紙や扉絵を飾る椿山の手による肖像画の外にもかなりの数の作品があるのではないだろうか。」と書いています。その文末で「渡辺華山の肖像画が画期的な作品であったと人々が気

づき、今後の研究が盛んになることを期待している。」と結ばれています。同年、第十六回國華賞贈呈式特別講演で「渡辺華山の肖像画について」を話され、また、二年後のテレビ出演として、平成十九年九月には、Eテレの新日曜美術館で、「この人が語る私の愛する画家「私と渡辺華山」」が放映され、出演されました。番組では華山ゆかりの地である田原市も取材していただきました。八十五歳で語る華山への想いを語り、「歯を見せて笑う珍しい武士」「手を縛られた獄中の自分の姿」など、キン先生が華山の絵を初めて見た時、そのあまりのリアリズムに度肝を抜かれ、「華山の生気みなぎる肖像画は、写実的であると同時に、人物の個性の再現なのです」と語られました。



平成二十年十一月に外国人出身の研究者として初の文化勲章を受章されました。平成二十六年の『ドナルド・キーン著作集 第十巻 自叙伝 決定版』の中に「『渡辺華山』を書いた理由」があり、文学者以外の評伝は、明治天皇、足利義政に次いで三人目でした。明治維新前後の江戸時代後期という時代を描くには政治と文学の両極に足を踏み入れて波乱の生涯を一途に駆け抜けた渡辺華山という知識人を中心に据えるるとよいことに気づいたと語っています。…門弟の椿山が描いた華山の肖像画が

見る者の心に忘れがたい映像を残すのは、「比較的幸福的な時期にある華山にさえ内に秘めた悲しみがある」ことを椿山がつかんでいたからだ、と説明し、「華山が将来の世代を惹きつけるとしたら、それは何よりも一個の人間——貧窮と迫害に屈することなく画業に邁進し、忘れ難い肖像画の傑作群を残した人物としてではないだろうか」と書いています。

平成二十九年四月、お会いしてから十四年目に、ご縁があり、田原市博物館名誉館長に就任していただき、その年十月八日の東京新聞「ドナルド・キーンの東京下町日記」に「賢者・華山に権力の弾圧」を掲載（愛知県田原市では、中日新聞に十月十六日掲載）直後の十日から翌日にかけての華山大祭まで田原を訪れ、ゆ



をすることができました。名誉館長としての来館はこの時が最後となりました。

昨秋に開催した田原市博物館の開館二十五周年記念特別展「渡辺華山の神髄」では、新日曜美術館でもスタジオに登場した「笑顔武士像画稿」「佐藤一斎像画稿第二」も展示されましたが、残念ながらご来館いただくことはできませんでした。特別

かりの地である城宝寺の華山墓所、華山神社をお参りしていただきました。田原市民の皆様の前でお話を聞くことはできませんでしたが、華山大祭参加者とは記念撮影

展開会後、図録をお送りしたところ、自分が知っている研究機関にも置くといので、数冊送ってくださいとの連絡が入りました。たいへんありがたう申し出でした。

年が明け、二月、平成から元号が切り替わっても名誉館長をお続けいただくことができるかなと考え始めていた頃、突然の訃報を伺いました。四月十日に東京の青山葬儀場でお別れの会が催され、山下政良田原市長とともに私も出席し、喪主のキーン誠己さんにごあいさつさせていただきました。壇上のにこやかなキーン先生の写真と会場に流れた映像をなつかしく拝見しました。

昨秋、東北を旅する機会がありました。華山・史学研究会での岩手で、キーン先生も東日本大震災の年、瀬戸内寂聴さんとの対談を行なった平泉の中尊寺も訪ねました。キ

ーン先生の愛した日本を振り返るよい機会になりました。ご冥福をお祈りいたします。そして、ありがとうございました。



平成三十年度華山・史学研究会研修視察

高野長英の生誕地―水沢・花巻の旅

平成三十年度華山・史学研究会研修視察は、十一月二十四日から二十六日、土曜日から月曜日にかけての二泊三日で行われました。毎年一泊二日がほとんどですが、今回は愛知県から岩手県までの行程でしたので、水沢と花巻で二泊することになりました。

岩手県水沢は、平成18年に水沢市・江刺市及び胆沢郡の前沢町・胆沢町・衣川村が合併して奥州市となっています。江戸時代、水沢は、伊達政宗の支配となり、政宗の従兄弟にあたる留守氏が水沢城に入り、水沢伊達氏となり、幕末までこの地を支配します。渡辺華山の蘭学研究仲間であった高野長英（一八〇四―一八五〇）の生誕地です。二人の交流・活躍の場は江戸でしたが、出身地である水沢には、高野長英記念館があり、華山の弟子だった椿椿山筆の高野長英像をはじめとした高野長英関係資料が重要文化財に指定されています。平成七年に開催された博物館秋の企画展「日本の夜明け展―華山とその同志」には、高野長英記念館からも多数出品していただきました。また、水沢区内には、

長英を含め、三偉人と呼ばれる後藤新平記念館、斎藤實記念館もあります。華山とゆかりのある町を訪ねる視察研修ですが、周辺の地域も視察していきます。今回は花巻まで足を伸ばします。

一日目、午前八時四十六分豊橋駅出発のひかり号に乗車した会員は、石川洋一・加藤克己・別所興一・樺山伸次・柴田雅芳・鈴木利昌の六名での出発となりました。東京に十時十分着、十時四十四分東京発の東北新幹線に乗り換え、十二時三十八分に一関に到着、一関駅前で昼食後、JR東北本線で最初の目的地、平泉へ向かいます。一関駅前で乗換時間を利用して、大槻三代の三偉人像を見学します。蘭学者、大槻玄沢（げんたく）・儒学者、大槻磐溪（ばんけい）・国語学者、大槻文彦（ふみひこ）の像です。次に向かった平泉は、奥州藤原氏が造営した中尊寺が有名です。田原市で中世に焼かれていた渥美古窯の製品が出土しており、藤原氏も渥美半島の焼物を好んで使用したのでしょうか。平泉では、レンタサイクル組とバス利用組に分かれて行動することになります。私はレンタサイクルを利用することにしました。まず、平泉駅前で荷物を預け、帰り時間の目標を定め、まず北へ向かい、国指定史跡柳之御所遺跡へ向かいます。柳之御所遺跡は平安時代後期にあたる11から12

世紀に清衡・基衡・秀衡の三代にわたって栄華を極めた藤原氏の政庁「平泉館」の跡と想定される遺跡です。ここを見たくて、レンタサイクルを選びました。まず、柳之御所資料館で発掘調査の資料とパネルや模型を見学し、バスでは通れない遺跡沿いの道をさらに北上し、高館義経堂の位置をやや遠目に見上げながら、平泉文化遺産センターへ向かいます。平成25年に田原市博物館で開催された「渥美窯展」に出品していただいた渥美古窯の大甕に再会しました。ちようどバス利用組が館にいましたので、館のスタッフにお願いして玄関で全員の記念撮影ができました。



次に向かったのは、平泉駅からは最も離れていますが、平泉と言え、中尊寺です。紅葉の時期を迎えてお客様も多い時期です。レンタサイクルを駐車場に停め、徒歩で登り坂を金色堂まで往復です。往路はずつと上りです。この坂は月見坂と呼ばれ、途中で薬師堂・本堂をお参りしながら、展示がある讚衡蔵（さんこうぞう）を見学し、メインの金色堂、経蔵、旧覆堂（きゅうおおいどう）、釈迦堂を見て、上って来た坂道を下って帰ります。鐘楼などが見られます。晩秋の夕暮れが心配になってきます。駐車場で駅に戻るベストルートを確認し、東北本線沿いの特別史跡無量光院跡の池を右手に見ながら西の金鶏山を見上げ、駅に向かいます。中尊寺と並ぶ見所の毛越寺は、駅には近いのですが、拝観時間には間に合わず、今回は見学をあきらめ、レンタサイクルを返却し、平泉駅から水沢駅へ東北本線で行きます。水沢駅に到着した頃には、真つ暗です。駅からホテルまでは一直線の駅通り沿いです。チェックイン後、一休みして水沢駅近くで夕食を取り、長い一日目の予定終了となりました。

第二日目は、ホテルから徒歩で、まず大安寺に向かいます。ここには、高野長英と母及び留守家の墓所があります。長英の墓の周囲には、『高



野長英全集』などを刊行し、長英の顕彰活動に尽力した高野家の現在まで続く代々のお墓もありました。さらに、徒歩で水沢公園内にある高野長英記念館へ向かいます。館内には、実資料が見られるコーナーと各地にある長英の足跡をたどるパネル展示、高野長英賞を取

った書籍の展示や寄贈図書であるいくつかの名を冠した文庫コーナー、長英を取り上げた番組をビデオテープでも見られるようになっていました。館で配布されている資料を集め、図書を購入し、記念館を後にします。昼も近くなり、記念館か



ら紹介していただいたレストランへ向かうため、公園内に建立されている後藤新平（一八五七～一九二九）や斎藤實（一八六〇～一九四〇）の銅像を見ながら散策します。昼食後、史跡の高野長英旧宅（非公開）、旧内田家旧宅（奥州市有形文化財）・奥州市武家住宅資料館を見学後、後藤新平旧宅（生家、岩手県有形文化財）、椎名悦三郎先生像、高野長英生誕地を見学しながら二・二六事件で凶弾に倒れた斎藤實の誕生地に建設された住宅と書庫とともに記念館を見学します。次に、後藤伯記念公民館、後藤新平記念館を見学します。後藤新平は高野長英の分家の出身で、

愛知病院長も任ぜられ、台湾総督府民政長官や東京放送局（NHKの前身）初代総裁、日本ボリースカウトの初代総長や東京市長の後、内務大臣兼帝都復興院総裁を務めています。水沢の三記念館を巡り、その後、水沢駅から新花巻駅を目指します。

新花巻駅からタクシーでホテルに向かい、チェックイン後、ホテル前の食事処で夕食を取り



ました。

最終日の月曜日は、新花巻駅へ戻る前提で、行程を考えます。まず、タクシーで三十分ほどかかりますが、花巻市太田にある高村光太郎記念館・高村山荘を目指します。少し前まではバス路線があったそうですが、現在は廃線となっていました。光太郎は昭和二十年の空襲により、アトリエを焼失し、宮澤賢治の実家に疎開しましたが、その家も空襲で被災し、太田村山口に粗末な小屋を建てて移り住み、七年を過ごします。その家が冬の厳しい地方だけに、建物自体を囲って保存されています。敷地内には高村光太郎記念館があり、彫刻「手」や自筆原稿などが展示されています。途中には花巻新渡戸稲造記念館もありましたが、新花巻駅近くで宮沢賢治（一八九六―一九三三）の関連施設を昼過ぎまでに見学したので、それ以外に寄り道はあきらめました。



賢治は詩人であり、童話作家、教師、農業指導者としても活躍しました。

宮沢賢治記念館には、大きな展示室を環境や信仰、科学や芸術など5つの分野に分けて学ぶことができます。展望ラウンジは花巻市内を一

望することもできます。この記念館が最も見応えがありそうでしたので、周辺にある宮沢賢治イーハトーブ館・ポランの広場、宮沢賢治童話村、花巻市博物館などは、残念ながらあきらめました。

新幹線の前定時間も近づいてきますので、新花巻駅に戻り、駅前の山猫軒で昼食をとり、午後一時十九分新花巻発の新幹線で東京経由で岐路へと向かいました。

研究会員 鈴木利昌



渡辺華山『毛武游記』

19

研究会員 加藤 克己

天保二年（一八三一）十月二十二日続き

華山たちは、足利学校聖廟へ行っていた。

（図なし、冒頭に「先聖孔夫子木造」とあるのみで、空白二ページ）

書庫ハ在リ廟ノ左ニ。宋板ノ左伝註疏、周易註疏、

文撰等、皆上杉安房守、同右京介、平氏政朝

〔臣〕等ノ所ニ寄進スル也。縹緗累々満庫ニ。余以テ

所見ル周易注疏ヲ、端平二年正月十日、鏡陽、

嗣隠、陸子道、先君手檀ニ、以テ朱點一伝之ヲ。

時大霜始晴謹記云々。子道、陸放翁ノ子ト云フ。

書庫は聖廟（孔子廟）の左にある。宋代に出版

された『左伝註疏』、『周易註疏』、『文撰』など、

すべて上杉憲実、同憲忠、北条氏政朝臣らが寄進

したものである。書籍がたくさん積み重なって、

書庫を満たしている。私が周易注疏を見たところ、

「端平二年（一二三五）正月十日、鏡陽、陸子道が、

※ 宋板 宋代の出版。

※ 左伝註疏 『春秋左氏伝』の解説書。正式に

は、『附釈音春秋左伝註疏』という。上杉憲実が寄進したもの。

『春秋』は、中国春秋時代の歴史書で、魯（山東省）の史官の遺した記録に孔子が加筆し、自らの思想を託したといわれる。

『春秋左氏伝』は、『春秋』の注釈書の一つで、魯の左丘明著と伝えられる。歴史的記事に富み、説話や逸話を多く集め、また、礼制に詳しく国家興亡の理を説く。

※ 周易註疏 周代に大成された易学『周易』（『易経』ともいう）の解説書。足利学校所蔵の宋版のこの書は、上杉憲忠が寄進したもので、国宝に指定されている。

文撰 文選（もんぜん）。周代から梁にいたる約千年間の文章・詩賦などを編集した書。足利学校所蔵の宋版『文選』二十一冊は、「金沢文庫」印が押されており、北条氏政が金沢文庫から持ち出して寄進したものである。国宝に指定されている。

※ 上杉安房守 上杉憲実（一四一一～一六六）。山内上杉家を継ぎ、十歳で関東管領となった。將軍足利義教と鎌倉公方足利持氏の調停に努力したが、持氏と不和になった。永享十一年（一四三九）、永享の乱で持氏が死んだのち、伊豆の国清寺で出家、諸国を行脚した。学芸を好み、鎌倉円覚寺の快元を招いて足利学校を再興、書籍・田畑を寄進した。

同右京介「右京亮」が正しい。渡辺華山著『客坐録』には「右京亮」とある。上杉憲忠（一四三三～一五四）。憲実の子。父とともに出

※ 上杉憲実（一四一一～一六六）。山内上杉家を継ぎ、十歳で関東管領となった。將軍足利義教と鎌倉公方足利持氏の調停に努力したが、持氏と不和になった。永享十一年（一四三九）、永享の乱で持氏が死んだのち、伊豆の国清寺で出家、諸国を行脚した。学芸を好み、鎌倉円覚寺の快元を招いて足利学校を再興、書籍・田畑を寄進した。

※ 同右京介「右京亮」が正しい。渡辺華山著『客坐録』には「右京亮」とある。上杉憲忠（一四三三～一五四）。憲実の子。父とともに出

家していたが、長尾景仲らの要請で還俗、文安五年（一四四八）関東管領となる。しかし、足利成氏（持氏の子）との対立が深刻化し、享徳三年（一四五四）謀殺された。

平氏政朝〔臣〕 北条氏政（一二三八～一三〇）。戦国大名小田原北条氏の当主。子の氏直に家督を譲ったのちも政治に深く関わった。豊臣秀吉の小田原攻めで敗れ、切腹を命じられて自刃。小田原北条氏は伊勢氏の出身だが、鎌倉北条氏（本姓は平）にあやかっ

※ 縹緗 累々 積み重なっているさま。また、連なり続くさま。

※ 余以所見 余が所見の『周易注疏』。この時、華山が『左伝註疏』や『文撰』も見ていたことは、寄進についての記述などが『客坐録』に書き写されていることよって分かる。

※ 端平二年 南宋の年号、一二三五年。

※ 鏡陽 不詳。

※ 嗣隠 不詳。

※ 陸子道 道は辺か。陸放翁の子。『客坐録』には、「陸子道」とある。

※ 先君手檀 不詳。『客坐録』には、「先君手標」とある。

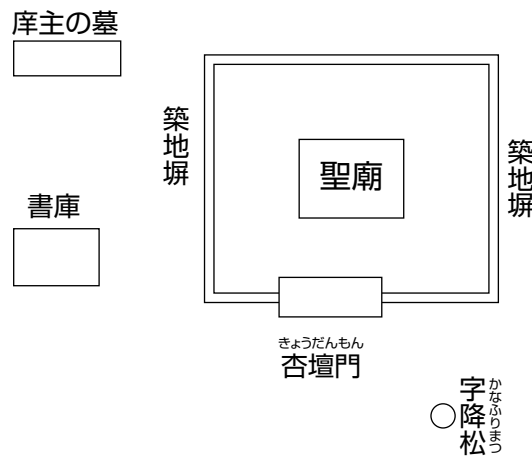
※ 朱點 朱書すること。

※ 大霜始晴 その日の天候を言っているか。『客坐録』には、「大雪始晴」とある。

※ 陸放翁 陸游（一二二五～一二二〇）。南宋の詩人。字は務観、号は放翁。

漢文部分では、前号ですでに聖廟内で胎内銘を読み、今号では外の書庫に入った。ここからの和文は、時間を少しさかのぼって、崋山たちが聖廟の門前に着いたところから始まる。胎内銘を読むいきさつ・経過がもしろい。

聖廟周辺略図



聖廟にいたる。廟は前に門あり、右左皆ツイジうちかこミ、むかひて右の方に小門あり。これより廟に謁す。此日は院僧用ありとていで来らず。岡田立助はちかきワたりの人なれば、うちのミテ帳を開、礼をあつくなし、おしえ乞。立助先だち、我輩あとにつきて門を入れれば聖廟。
(三行ほど空白)

聖廟に行った。廟は前に門（杏壇門）がある。右左すべて築地塀でうち囲み、向かって右の方に小さな門がある。ここから廟に入る。この日は廟を管理している僧が、用事があるということ出てこない。岡田立助（東塙）はここから近い所の人なので、（岡田に）頼んで扉を開いてもらい、礼儀正しくして、（岡田に）教えを乞うた。立助

杏壇門 奥に聖廟が写っている。



が先に立って、自分はその後について門を入れれば聖廟である。

※ 前に門 杏壇門。第17回（40号）参照。

※ ツイジ 築地。築地塀。柱を立て、板を芯として両側を土で塗り固め、屋根を瓦で葺いた塀。

※ 帳 厨子などの小さい木製の扉。

階に登る。六間（約十一メートル）四方もあるだろう。みな木製で土を使わない。上段に御簾をたれ、簾の内におしまづきあり。これハ八卦を敷料にせしにや。抑此堂いつの頃よりか一年の吉凶を筮し、江戸へも奉り、此のわたりの諸侯へも奉りて券禄をするなり。可_レ笑_フ也。

階段に登る。六間（約十一メートル）四方もあるだろう。みな木製で土を使わない。上段に御簾をたらし、簾の中に机がある。これは（占いをすること）八卦の保管料をとっているのだろうか。そもそもこの堂は、いつ頃からだろうか、一年の吉凶を占って、江戸へも報告し、この辺の諸侯にも知らせ、報酬を受け取っている。笑うべきことである。

※ おしまづき 机。八卦を占う台。

※ 八卦 占いのものになる八種類の形。占い。

※ 敷料 倉敷料。倉庫に物品を預けた時に支払う保管料。

※ 筮 占いに用いる具。めどき。また、めどきで占うこと。占い。

※ 券禄 手形の俸給。

聖像は又一層高き坐におハしまし、御厨子の中に安置す。前にミどりの帳たれたり。其御像ハいかにも千年外のものにしあれば、なにとなく敬を生じ、ありがたき御ありさまなり。

聖像は、また一層高い場所におありになり、御厨子の中に安置されている。前面に緑色の幕が垂れている。その御像は、いかにも千年以上昔のもののように、何となく尊敬の念がわいてきて、ありがたい御ありさまである。

※ 坐 する場所。

※ 厨子 仏像・舍利・経巻などを納め置くもの。

※ 帳 とばり。垂れ幕。第17回(40号)の漢文中には「碧幃」とあった。

岡田云、ワが父君のワかかりし時、常に此学校が遊び玉ひしに、此御像の底に何やらむものかきてありしを見しとのたまひたり。されどか、る尊く厳に祭りたてまつれば、さすがに一覽せん事ぞかたくぞある。常にハ和尚つきそひて其由来を説き、人をおどろかし侍るが、今日はいかなる事ありてか、ワれに托し来らず。されども茂木氏の子つきそひ来れば、これをすかして御像を引出し奉らんと云。

岡田が言う。私の父親が若かった時、いつもこの学校で遊んでいたが、この御像の底に何かしら文章が書いてあるのを見た、と言っておられた。しかし、このように尊く厳重に祀られているので、

さすがに見ることは困難である。いつもは和尚が付き添って、その起源・来歴を説明して、人を驚かせているが、今日はどのようなわけだろうか、私に任せて、和尚は来ない。そうであるが、茂木氏の子が付き添って来ているので、これを言うくためて、御像を御引出し申し上げたい、と言う。

※ 物かきて 文章を書いて。

※ 茂木氏 足利学校預(管理者)の茂木善治。

※ すかして 機嫌をとって、こちらの言うことを聞き入れるようにさせて。言いくるめて。おだてて。

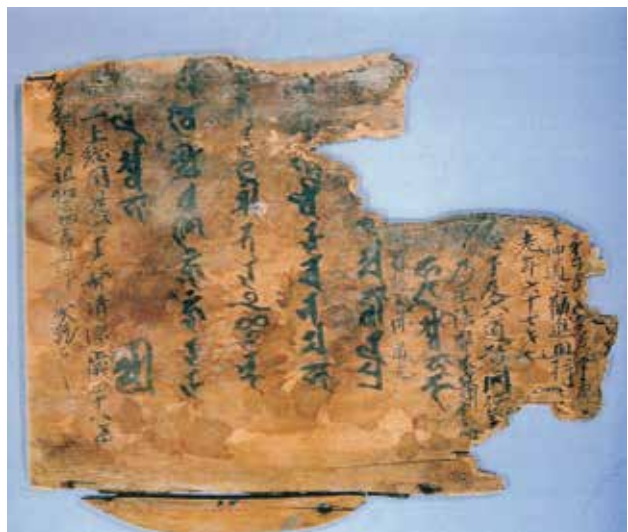
胎内銘は二カ所あった

岡田が父親から聞いていたのは、像の底に何か書いてある、ということだった。しかし、華山が読んだのは、前号にあったように像の背面部に書かれた文字である。華山たちは、その場所の違いを追及しなかった。昭和の解体修理で、背面と底部の二カ所に胎内銘があることが分かった。

岡田の父が遊んだ頃は、像の底板が外れていて、像を動かせば、底板に書かれた文字を見ることができたのだろう。ところが、華山たちが訪れた時には、底板が像に打ち付けてあった。華山は、底板の穴から中を覗き込んだのだから、底板の内側は見えない。背面の内側に書かれた文字を、暗い中で苦労して読んだ。背面に銘があったので、底部のことは忘れられてしまった。

背面の銘は前号に乗せたので、今号には華山が見ることのできなかった底部の銘を載せる。

像底板裏面墨書銘(史跡足利学校提供)



予甚よろこびにたえず。事を好むよりかゝる不敬にハあなれど、又此廟に來り自然に此底の題名を見んやうやあると、先御帳かいやり御うしろのかたに手をやり抱き奉れば、その重き事ひとりの力におよびがたし。おのゝ力を出し、いや声も声あげてやをら出し奉り、御簾打あげおしまづきの上に置き奉りて、御しりの方よりのぞき見るに、おくまりたる処なれば、日かげかすかにさして得ワからざりけれ。

私はたいへん喜んだ。事件を起こすことを好むというよりも、このような不敬ではあるけれども、またこの廟にやってきて、自然にこの(聖像の)

底の題名（胎内銘）を見ないということがあるだろうか、まず御簾（聖像の）御うしろの方に手をやって抱き奉ると、その重いこと、ひとりの力ではとても持てない。それぞれ力を出して、大きな掛け声をあげて、ゆつくりと出し奉り、御簾を持ち上げ、机の上に置き奉り、お尻の方からのぞき見ると、ちよつと奥に引つ込んだので、日光がかすかにさしている程度で、よく分らない。

※ **事を好む** 事件が起こるのを好む。変わったことが起こるのを待ち望む。

※ **不敬にハあなれど** 聖像に外部の人間が触れることなど許されないことは、重々承知しているが、何が書いてあるのか知りたいという探究心のほうが勝った。

※ **題名** ここでは、胎内銘を指す。

※ **かいやり** 手で払いのけ。押しやり。

※ **いや声** 掛け声。

※ **やをら** ゆつくりと。静かに。そつと。

※ **おくまりたる** 奥深くになった。ちよつと奥に引つ込んだ。

※ **日かげ** 日影。太陽のひかり。日差し。

※ **得** よく。よう。あえて。

その氏（底）ハ打かけて御腹の中あらはなり、外面ハかたきろき木もてつくり、其上布をもてはり、うるしせしなり。幾十度も補ひつくりたるとおほしくて、あたらしき木もてくもでに打つたし、外面のかたのやぶれざらんやうにせしなり。

その（聖像の）底は割れて欠けていて、おなかの中があらわになっている。外側は固く黒い木でもって作り、その上に布を張って、漆を塗ってある。何十回も修補したことをうかがわせ、新しい木でもって蜘蛛手に打ち付け、外側の方が壊れないようにしてある。

※ **くもで** 蜘蛛手。材木などを四方八方に打ち違えて組んだもの。

像底板裏面の墨書銘（和漢字部分）

前号記載『足利学校孔子像修理報告書』より

（ 欠 失 ）

□弟子民□江幸等ヲ幸念

幸神道之勸進興行

□老年六十七才也

恩下及六道皆同仕

乃至法界平等利益

（梵字略）

佛壽位 善佛 道光

（梵字略）

（梵字略）

（梵字略）

（梵字略）

（梵字略）

脇工上総国是モ 六十六部清源歳四十八才也
雲州ノ学徒ニ祖伯云物書興行ニテ成就之

その木の上に何やら物かきていくくだりもあり、とミかうみせるに、たゞ御簾もれてさし入日影ばかりなれば、得読がたくて友どち打つど

ひこれなん何といふ文字なるべし、これなん年の名なるべしなどといえど、たれかうとよミうるものなし。

その木の上に何かしら文字が何行か書いてある。あちこち見てみても、ただ御簾からもれてさし入る日光だけなので、（暗くて）読むことができない。一緒にいる仲間が集まって、「これは何という文字だろう。これは元号の名なのだろう」と聞いてみても、だれもこうだと読める者はいない。

※ **その木** 本文では外側に打ち付けた木のようにも受けとれるが、銘は外側ではなく、胎内にある。

※ **くだり** ここでは「行」か。上から下までの一列。文章などの行。

※ **とミかうみ** 左見右見（とみこうみ）。あっちを見たり、こっちを見たりすること。また、あちこちようすをうかがうこと。

※ **友どち** 友達。仲間。

※ **打つどひ** うちつどい。集まって。

※ **年の名** 元号か。

胎内銘を読むのに悪戦苦闘しています。和尚の留守に内緒で見えてやろうとしたのですが、まもなく和尚が来ます。華山たちの行為が和尚にばれたら。次回は、『毛武游記』の中で最もハラハラさせられる場面から始まります。

（続）

『四州真景の旅』⑤

旅先で訪ねた人物 久保木清淵

研究会員 中神昌秀

一 序

華山は、文政八年（一八二五）夏、利根川下流域を旅し『四州真景図』（重要文化財、個人蔵）を制作します。その旅の中で訪ねた人物のうち、最も重要なものは、下総国海上郡荒野村（現千葉県銚子市）の富豪 大里庄治郎（一七八三―一八四五）です。そして、もう一人の重要人物が下総国香取郡津宮村（現千葉県香取市）の名主 久保木清淵です。大里については華山会報第三九号、また続編を四一号で書いたので、今回は久保木清淵を訪ねる旅をしてみたいと思います。



久保木清淵遺跡（旧宅跡）
千葉県指定史跡

二 華山・史学研究会
清淵旧宅調査



津宮浜鳥居

平成二十一年秋に華山・史学研究会で、佐原周辺を訪ねたことがあります。香取神宮へ参拝した後、浜鳥居と呼ばれる大鳥居を見学に行きました。鳥居は、利根川の河川敷にありました。浜鳥居の近くに久保木清淵の生家があると聞いたのですが、乗って行ったタクシーの運転手に聞いてもさっぱりわかりません。堤防の眼下に土蔵のある旧家らしき家が見え、長屋門がありますが、表札がありません。近所で聞こうとしましたが、人は全く見かけず、確認ができませんでした。利根川沿いを走る国道三五六号に出てみましたが結局分かりませんでした。清淵宅に関するたわいもない思い出です。

三 清淵の生い立ち

久保木清淵は、下総国香取郡津宮村の名主久保木清英の二男として宝暦十二年（一七六二）に生まれ、幼名を新四郎、名は清淵、家名を継いで太郎右衛門と名乗ります。号は蟠龍、仲黙のほか、竹を愛したことから竹窓、竹陰、竹亭など竹にちなんだものが多くついています。津宮村を相給地とした領主の旗本小笠原安房守政恒から士分を許されています。

清淵は父について和漢書を学び、一一歳から香取神宮別当寺の一つである、根本寺の吞舟について学びます。清淵の墓碑には「年七八歳、其の父親より古文考経を授かる。十一歳、郷先生松永吞舟に従ひて句讀を受け、小學四書五經、皆誦を成せり。」とあります。

四 清淵の師吞舟松永北溟

吞舟（一六九八―一七八〇）については、『四州真景図』釈文にも、『眞言宗吞舟ノ弟子朱子筆』という記述が出てきます。ところで、吞舟とはどんな人物だったのでしょうか。

吞舟は、一代の奇僧と言われ、性格は豪放磊落、奇行に富み、酒豪でした。そして和魂漢才の士で、草書、俳諧にも秀でていました。

紀州有田出身の水谷勝國の子として、下総国海上郡下永井村（現千葉県旭市）で生まれました。幼少期に父母と死別し、寺に引取られ、出家し

て法泉となります。やがて寺を出て、佐倉にある叔父の家で暮らすようになり、父方の姓である水谷ではなく、母方の姓である松永を名乗ります。一六歳から五年簡、林家の門下に入り昌平覺で学びます。その後、才覚を認められ、越智氏に仕え二五〇石を賜りますが、それを辞し、京に上ります。

三十歳の時、京で再び僧となり、号を吞舟、諱を北溟と名乗ります。真言宗豊山派総本山神楽院長谷寺で修行した後、京の各檀林の講師として数多くの僧を薫陶しました。孝経を研究したのも京時代です。

三九歳の時、京を去り漂泊の旅に出ます。四一歳の時、津宮に来て清淵の父の紹介で香取の根本寺に入ります。吞舟は、酒を友とし隠遁生活を送り、香取界隈に四三年住みます。

安永九年（一七八〇）、津宮の正法院にて、八三歳で歿します。一生涯孤独であった吞舟の葬儀は、清淵の父によって執り行われました。

翌天明元年（一七八一）に門人であった智山院の沙門總義と恵峰山主の義阪睿運の二人が、先



千佛寺 吞舟の寿蔵碑と墓碑
香取市文化財

師の死を悼み津宮を訪れ、墓碑と寿蔵碑を建立しました。寿蔵碑は、「嵯峨後學和漢兩派及第松永友也宗弼之碑」とあり、「吞舟師也、南紀有田郡廣縣之人也、氏族松永彈正少弼之遠裔也、名友也、字良弼、其性也、卓活而嗜酒、醉則陶々」という撰文で始まります。

そして、寿蔵碑の最後は、「本來曲直、大道明々、風月萬古、嗚呼先生、門人 洛東智山留學 沙門括友總義謹誌」、また「壽林成曲、酒泉飛觴、松柏共契、寧代更長、洛陽惠峰山主 義阪睿運謹題」と刻まれています。

五 考経復元と『補訂鄭註孝経』出版



『補訂鄭註孝経』

清淵は、考経の復元と『補訂鄭註孝経』の出版事業をしています。「考経」は、一三経（易、書、詩、周礼、儀礼、礼記、春秋三伝、論語、孝経、爾雅、孟子）の一つで、江戸時代、寺子屋の経書入門書として広まりました。

現存する考経は、「古文考経／孔伝本」と「考

経／鄭註本」の二つがありますが、見出しの『補訂鄭註孝経』は鄭註本の孝経を補訂したという意味です。『鄭註孝経』は律令以前に日本に渡来しましたが、中国では亡失し、日本にのみ残存する、いわゆる中国佚書でした。しかも、日本でも『群書治要』にその抜粋だけが残されたものでした。

清淵の師吞舟は、京で群書治要本を手写し、それを清淵に授けたのでした。「吾、京師ニ在リシ日、抄写シテ之ヲ蔵ス、今以汝ニ授」と述べています。清淵は吞舟の没後、師が生前に果たせなかった、後漢の鄭玄による『孝経』註釈の復元に努めます。享和二年（一八〇二）、清淵四〇歳の時、『補訂鄭註孝経』を完成させます。

清淵の『補訂鄭註孝経』で特筆すべき点は、単に中国佚書の復元だけに止まらない点です。清淵は、享和四年（一八〇四）に、手製の木活字版により同書を刊行します。出版に当たり、自分の手で必要な木活字を彫り、活字を組み上げて刷ったのでした。その苦勞について『李氏易伝』見返し右欄下方に、朱印で「一植一検、刷り畢リテ又タ検シ、務メテ査点ノ力ヲ竭ス。」と記されています。木活字本は、『息耕堂略戒告訓』等六冊があります。

六 清淵の民衆教育

清淵は、儒教以外にも国学、暦学、天文学などに精通し、特に民衆教育に熱心で、私塾「息

耕堂」を開き、子弟は数百人に達しました。また清淵は、水戸藩にあった藩校の分校とも言ふべき郷校でも講義をしました。水戸藩南郡奉行の小宮山楓軒（一七六四―一八四〇）は農民の教化、殖産興業に尽力し、名郡宰ぶりを發揮したことは水戸藩で後々まで語り継がれています。が、農村振興



二十三夜尊堂
(旧延方郷校聖廟)

策の一つとして文化四年（一八〇七）延方（茨城県潮来市）に延方学校、後の延方郷校を開校します。清淵は招かれ、水戸藩郷士で儒学者の宮本茶村

（一七九三―一八六二）とともに、毎月数回、儒教の教典である経書を講義しました。水戸藩には郷校が一五校ありましたが、延方郷校は、その中でも小川稽医館（茨城県小美玉市小川）に次ぐ歴史を持つ郷校です。延方郷校の聖廟は明治十二年（一八七九）に移転改修され、二十三夜尊堂として現存しています。

『四州真景図』釈文にも、『〇郡奉行富山次郎右衛門 文化四卯 醫者會所 始メ潮来ニ講談所ヲ建ル積リナリシガ便利ニ付延方、講談所ヲ建リ津宮ヨリ延方迄一里半許 苗代植ノ時此小

宮山遺勸農 薪改ノコト」と記述があります。

また、小宮山は、延方郷校に関し清淵の墓表の撰文に「講設郷校教子弟、余喜其舉、勤勉之創書院於延方村、遂屈先生為師、先生比月必來講經、子弟始如嚮學、我候嘉賞之、給月餼、以報其勞、国相中山子弘、見問道、余之所以往來親善、亦以是也、於是至茨城新治等、距書院遠者、一再講先生、開筵誨諭、子弟列席受教者、每教百人」と書いています。この撰文の書き下し文は、「郷校を設けて子弟を教へむことを謂ふ。余、其の舉を喜びて之を勤勉し、書院を延方村創め、遂に先生を屈して師と為す。先生、比月必ず來りて經を講ず。子弟始めて學に嚮ふを知る。我が候之を嘉賞し月餼を給して、以てその勞に報ゆ。国相中山子、引見して道を問ふ。余の往來親善する所以、亦是を以て也。茨城新治等の地、書院に距るに遠き者、亦一再先生に請うて、筵を開きて子弟を誨諭す。席に列して教えを受ける者数百人」となります。（森銑三著作集より引用）

七 清淵と伊能忠敬

清淵は、日本初の実測精密地図を作成した伊能忠敬（一七四五―一八一八）との親交も深いものがありました。忠敬と清淵は、寛政五年（一七九三）二月から六月にかけ、伊勢大廟、神武陵を拝し、近畿地方の名勝を遍歴しています。この旅は「関西遊記」という旅行記として残っています。



御用旗

文化元年（一八〇四）には、忠敬は、清淵の『補訂鄭註孝經』完成に当たり、序文「補訂鄭註孝經序」を寄せています。時に清淵四二歳、忠敬六〇歳でした。

また、清淵は忠敬の「大日本沿海輿地全図」の完成に多大な協力をしています。忠敬が全国を測量する時に掲げた「御用」の旗は清淵の書です。伊能忠敬書簡の中に『此度染立候のぼり四本、前の幟と同様に紺地白文字宣候。夫れにて六本同様相成り候。御用と斗に候得ば、前のぼりの通に染候方宣候。』「測量方」三字書加候』と御用旗の制作について書かれています。忠敬は五一



地図御用所跡案内板
東京都中央区教育委員会

歳の年に佐原から江戸に居を移し、七四歳の時、八丁堀亀島（東京都中央区日本橋茅場町二丁目一二番地付近）の自宅で病死します。忠敬の自宅は引続き地図御用所として使用され、幕府天文方高橋至時（一七六四～一八〇四）の嫡男で後に幕府天文方筆頭となる景保（一七八五～一八二九）を中心に「大日本沿海輿地全図」の作業が進められます。

清淵は地図御用所に通い、地図の完成に尽力しました。忠敬の孫にあたる伊能忠誨（一八〇六～一八二七）が書いた『伊能忠誨日記』の中の文政四年（一八二二）三月九日には「津宮先生、予、高橋候へ行く」、八月二日には「予、役所へ行く、先生入来、但し津宮先生也」など何度も清淵が地図御用所に通った記述が出てきます。

また文政四年、幕府に提出された「大日本沿海実測録」一四巻の序文の末尾には伊能忠敬謹識と書かれています。これは清淵が寄稿したものです。文政四年六月五日の『伊能忠誨日記』には、「序文下書き、津宮より来た」と書かれています。

平成二二年国宝に指定された「伊能忠敬関係資料」（伊能忠敬記念館蔵）の中の「伊能忠敬像」に添えた讃（絵に添える文章）も清淵によるもので、讃は「家門修行 篤前列 地域成図 報国恩 知是勤梁 不朽事 能令余慶 在児孫 久保木清淵拜書」と書かれています。

八 清淵の墓碑



久保木清淵墓碑



墓碑拓本

清淵は文政二二年（一八二九）、六八歳で歿しました。墓は、屋敷から約一キロ離れたJR成田線沿いの小高い丘の上にあります。墓碑は高さ二メートル、幅一・五メートルの平石です。墓碑の標題には「故竹窗先生久保木君墓表」とあります。そして末尾には「水戸 小宮山昌秀撰 立原任書」の文字が刻まれていて、小宮山昌秀（楓軒）の撰文、谷文晁（一七六三～一八四二）門下で華山の兄弟弟子でもあった立原杏所（一七八六～一八四〇）の書であることを示しています。

九 終わりに

大里庄治郎を書いた後、次は久保木清淵を書かなければと思っていましたが、清淵は有名な割に資料が少なく、困っていました。特に久保木良著『我祖久保木竹窓とその周辺』という文献は、自費出版であり、入手できませんでした。それでも、いくつか資料が手に入ったので、思い切って書いてみました。

清淵を書く、どうしても私の苦手な漢文がでてきてしまいます。読者の皆さんも読みづらかったかなと思います。申し訳ありません。それではまた。

参考文献

- 森鉄三『森鉄三著作集』第八巻 人物篇八 久保木竹窓 中央公論社
- 杉 仁『下総津宮村名主「窪木清淵」の書物と『補訂鄭註孝経』復元考証』「書物・出版と社会変容」研究会 一橋大学
- 本宮三香『松永北溟略傳』上・下 小原大衛編 房総郷土研究 青史社
- 瀬谷義彦『水戸藩郷校の史的研究』
- 佐久間達夫『伊能忠敬と久保木清淵の契（一）』伊能忠敬研究 第四二号 伊能忠敬研究会

※連載中に、一度紹介した参考文献は紹介を省略しています。

公益財団法人華山会 田原市博物館 からのご案内

田原市博物館企画展のご案内

七月二十日(土)～九月八日(日)

企画展 浮世絵展「物語と風景と
こわい絵」

(企画展示室)

江戸時代、庶民も楽しめる絵の観賞としての浮世絵が生まれました。人々の関心に寄せてその時代の生活や流行が、特に木版印刷によって多くの人の目に触れ、大衆文化が花ひらきました。浮世絵によって描かれた流行を中心に、物語と風景と幽霊画・妖怪画の現代に関わりがあるものを展示します。

展示解説 七月二十七日(土)・八月二十四日(土) いずれも午前十一時

講師：博物館学芸員

企画展関連ツアー 八月十一日(日) 午前十時～午後四時三十分

見学先：田原市博物館・田原文化会館・渥美郷土資料館・吉胡貝塚資料館・民俗資料館

対象：市内在住・在勤者
定員：30名(要申込)

同時開催 渡辺華山、谷文晁、椿椿山等が描いた山水画、真景図を展示

(特別展示室)

九月二十日(土)～十月十七日(日)

企画展 日本のアニメーション美術

の創造者 山本二三展「天空の城ラピュタ、火垂るの墓、もののけ姫、時をかける少女」

(企画展示室)

数々のアニメーションの背景画、イメージボードを担当した山本二三の作品を展示。入念な取材と構想、精密な描写によって表現された背景画の世界を鑑賞できます。



天空の城ラピュタ「荒廃したラピュタ」
1986(昭和61)年
©1986 Studio Ghibli

同時開催 渡辺華山自刃の刀、遺書をはじめとする重要文化財 渡辺華山関係資料を展示(特別展示室)
詳細はチラシ等でお知らせします。

平常展のご案内

五月二十五日(土)～七月十五日(月・祝)

渡辺華山、椿椿山の華やかな花鳥画を展示

(特別展示室)

田原の美術 館蔵品展

(企画展示室一・二)

常設展示室では渡辺華山の生涯を展示しています。

民俗資料館では田原の暮らしを中心に展示しています。

渥美郷土資料館・二ノ丸櫓でも所蔵品を展示しています。

観覧料

企画展浮世絵展 一般四〇〇円

(三二〇円)

企画展山本二三展 一般七〇〇円

(五六〇円)

平常時 一般 二二〇円(一六〇円)

小学生一〇〇円(八〇円)

企画展開催時は小・中学生無料

毎週土曜日は小中高生無料

(一)内は二十人以上の団体料金
東三河在住の小中学生は、ほの国こどもパスポートもご利用ください。

休館

毎週月曜日(祝日の場合はその翌日)、展示替日

(公財)華山会から
華山・史学研究会会員募集中

申込場所 華山会館事務室
毎月第四土曜日研究会
視察研修(年一回)に参加できます。

華山会報 第四十二号
令和元年六月一日発行
編集発行 公益財団法人華山会
理事長 鈴木 愿
常務理事 林 勇夫
事務局長 大根義久
〒四四一-三四二-一
愛知県田原市田原町巴江一二の一
TEL 〇五三一・二二・一七〇〇
FAX 〇五三一・二二・一七〇一

編集協力
田原市博物館
華山・史学研究会
会長 小林一弘
吉川利明 加藤克己
山田哲夫 石川洋一
林 哲志 中村正子
柴田雅芳 中神昌秀
池戸清子 樫山伸次
藤城精一 小川金一
鈴木利昌

※華山会報ご希望の方は華山会館・田原市博物館にお申し出ください。
次回発行予定 令和元年十二月一日